
魔法少女カイゼルヴィヴィオ

架琉魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女カイゼルヴィヴィオ

【Nコード】

N0423N

【作者名】

架琉魔

【あらすじ】

これはヴィヴィオに在りえた可能性の一つ、ヴィヴィオがレオやコロナのような友達に出会えなかった世界。聖王のクローンであるが故に負った宿命に思い悩むヴィヴィオを導こうとなのはが提案したのは、パラレルワールドの地球に引っ越して暫くの間成長を見守るというものだった。しかしなのはの思惑が、それとも完全な偶然か、ヴィヴィオ達の住む海鳴市に、人間の記憶を読んで怪物化してやがて謎の災害を呼ぶ正体不明のロストロギア『アイデアゴースト』が降り注ぐ――！

第一話：それは、私の宿命なの（前書き）

この小説は、魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s 放送直後からブログや掲示板に落書き程度で書き始めたシリーズです。

公式のV i v i d やF o u e r s とは歴史、デバイス、世界観e t c e t c … 設定が大きく変わってしまったていますが、そこはあくまで本作はS t r i k e r s 終了直後から分岐した『非』公式のパラレルワールドということで何卒ご了承頂ければ幸いです。

それでも読んで頂けるといふ心の広い方は、どうぞお楽しみくださいませ。

第一話：それは、私の宿命なの

この果てしない時空の海の中には、幾万幾億の人たちが居て…
いろんな人たちが居て、いろんな思いが星の数ほどあって…
誰かが誰かと、きつとどこかでつながっている…

出会いと出会いが折り重なって、きつと私も誰かと繋がっていく。
これは、私が見たこともない世界で大切な人たちと出会う物語。

『魔法少女 カイゼル ヴィヴィオ』はじまります。

……第一話それは私の宿命なの……

J・S事件から4年後のこと…

聖王協会と時空管理局による会合が行われた。

議題は、ある意味で今更の事…

「お忙しい中今日の議会に出席頂き感謝いたします。」

丁重な議長らしき人物が言うと、突然の召集により召還された
時空管理局地上本部戦技教導隊三佐、高町なのはは発言した。

「…まず、本日の審議とは一体何の決議なのかをお聞かせ願いたい
のです。」

「高町ヴィヴィオの将来の聖王就任を決議するものです。」

議長の答えに、管理局側は動揺を隠しきれなかった。

後見人、フェイト・T・ハラOWN行為執務官は問う。

「彼女は時空管理局地上本部戦技教導隊、高町なのはは三佐の
子息として己の選んだ道を進ませるはずでは？」

それに落ち着いた様子で答えたのは、彼女たちとは旧知の仲である
聖王教会教会騎士団長、カリム・グラシアだった。

「高町ヴィヴィオは、聖遺物より取り出した聖王の遺伝子よりクロ
ーニングされた

聖王の正当な後継者であり、選択によっては数千年の時を超えて再
び現れた

新たな聖王の座を受けることができます。」

強制でない分審議は難行し、結局は本人の意思によって1年後に再
決議されることとなった。

審議の終了後、なのはとフェイトは、教会の廊下を歩きながら話を
していた。

「どう思う？」

先に口を開いたのはフェイトだ。

「うん、教会側は最後までどうして今になって

ヴィヴィオが聖王になれると言い出したのかを黙ったままだった。
カリムさんでさえも隠しているって事は、相当重大な秘密があつち
にあるってことだね。」

なのはが言つとフェイトは少しうつむいて言った。

「ヴィヴィオは困ってた。」

やっぱり、聖王の器として生まれたことが、これからも彼女を悩ま
せていくのかな…。」

フェイトの言葉になのはは

首を横に振り、強い瞳を向けていった。

「そうならないために、私たちは今頑張らなきゃ。」

そして、当の本人高町ヴィヴィオはここで待っているようにと言われ
教会の庭のベンチに座りで呆けていた。

サイドポニーを結ぶ髪飾りについた二つの宝石がきらりと光る。

かれこれ1時間ほど待たされ、ヴィヴィオは緊張よりも強い退屈に
耐えていた。

思い立ったように手に持った缶ジュースを飲み干し、缶を上空に放り投げる。

なのはから教わった簡易訓練のひとつである。

「グングニル、カウント。」

『all right.』

『jawoh.』

髪飾りの宝石から電子的な音声が響く。

「カイゼル マジカル」

ヴィヴィオの足元に、虹色のミッドチルダ式魔方陣が形成される。

「福音たる輝きこの手に響け、導きの下鳴り響け…」

デイバインシューター・イミテーション…シュート！」

ヴィヴィオの手から放たれた虹色のデイバインスフィアが重力加速度によって静止した缶を弾く。

…カンッ！！

『Ten.』 『?.(eins)』

乾いた音と同時に、宝石達もそれぞれカウントを始めた。

「コントロール…ッ」

ヴィヴィオはスフィアのコントロールを始める。

ドイツ語は弾いた数を、英語は残りの秒数をカウントし続ける。

『Nine Eight Seven』 『? ? ? ? ?…』

「く…」

ヴィヴィオの顔に焦りが見える。

やはりミッド式魔法はあまり得意ではないようだ

『Three』 『? ?』

「フィニッシュ！」

ヴィヴィオがそうついた瞬時に彼女の髪は解け。

髪飾りは二つのコアを持つ双頭の槍となる。

それをバットのように振りかぶり落ちてきた缶を打つ。

缶は弧を描いて前方のゴミ箱に入る筈だったのだが、大きく軌道を外れて茂みの中に落ちてしまった。

「あちゃあ・・・」

ヴィヴィオが槍を髪飾りに戻すと、

髪飾りは自動的に浮き上がりヴィヴィオの髪をサイドポニーに結う。それを確認し、ヴィヴィオは茂みの中に缶を探しに入っていた。

「あつた。」

少々難しい体勢で缶をとる。

そして茂みの隙間に座り込み、ふと辺りを見回す。

そして思い出した。

「なのはママと初めてであった時もここを通って庭に迷い出たんだった。」

「ヴィヴィオ」

なのはたちの声が聞こえ、ヴィヴィオは慌てて茂みから飛び出る。

「え？…もう、ヴィヴィオったら。」

そう言つてヴィヴィオについた木の葉を払うフェイト。

なのはは少し驚いた後、少し腰を下ろしてヴィヴィオの頭をなでる。

「フェイトちゃん。」

「何？なのは。」

「魔法との出会い、フェイトちゃんとの出会い、

そしてヴィヴィオとの出会いは、私やフェイトちゃん、

周りのいろんな人たち、そしてヴィヴィオ本人にも大きな転機になったよね。」

「うん。…あの、なに思いついたの？」

「ヴィヴィオ、お引越ししようか…地球に。」

「え、ええゝゝッ!？」

驚いて叫んだのは、フェイトのほうが先だった。

……次回予告……

私、高町ヴィヴィオは何故か地球で暮らすことになりました。でもその地球は、第97管理外世界じゃなくて……

そしてこれはみんな予想外！！

お向かいに住んでいた子は…

次回、魔法少女 カイゼル ヴィヴィオ

『出会いは突然、そして』に、デュアル・ドライブ！！

第二話：出会いは突然、そして

ヴィヴィオには才能があつた…

それこそ魔法学校を主席卒業できるほどの才能が。

聖王教会の突然過ぎる提案。

それはヴィヴィオを将来、教会の最高責任者『聖王』とするものだった。

私はヴィヴィオ自身に、未来を決めてもらいたい。

私やフェイトちゃんが、魔法と日常の間で自らの道を選んだように。

誰かと思いを、繋げていくために。

『魔法少女 カイゼル ヴィヴィオ』 始まります。

……………

時空管理局巡航船『アースラ？』

「有難う御座いますクロノ提督、こんな所まで運んでもらって。」

「いいさ、そんな畏まらなくても。」

航路に沿っているし、せつかくの長期休暇なんだ。」

なのはの言葉に答えたのはクロノ・ハラオウン提督。

仕事の鬼と言われる彼だが、今回はヴィヴィオのこともあり、転居に協力している。

「海鳴市とはいえ、近い平行世界を選ぶとはな。

母さんといい、ssクラスの魔導士が管理外世界に住むとなると、手続きは大変じゃなかったか？」

「…そのことだけどね…」

なのははペーパーモジュールを出して資料をクロノに見せた。

海鳴市、海と山に囲まれた自然豊かな土地。

ある程度都市化は進んでいてミッド首都クラナガンと良く似た雰囲気である。

「ママー、早く早く！」

「はいはい今行くよ。」

駆け足で新居へと向かうヴィヴィオに追いつこうと駆けるなのはとフェイト。

「懐かしいね、なのは。」

「うん、１１年前の事故の時、リハビリとして一緒に走ったよね。」

「いつもなのはが先にへばってたよね。」

「な、フェイトちゃんだって転んでばかりだったじゃない。」

どさっ

その時、先を走っていたヴィヴィオが転んだ。

「ぷえっ…。」

「ヴィヴィオ…！」

フェイトが心配して駆け寄ろうとした時、たまたまヴィヴィオの側を歩いていた少女が手を差し伸べた。

「大丈夫？」

それを見た三人は目を丸くした。

栗色の髪、特徴的な形状のツインテール、紫色のきれいな瞳…

その少女は余りにも、十年以上前、魔法と出会った頃の高町なのはに似すぎていたからだ。

「どうしたの？怪我しちゃったの？」

「う、ううん。あの、君がなのはママにそっくりで…。」

声までそっくりなのは本人の声である。

少女に手を引かれ、ヴィヴィオは立ち上がりながらおそろるおそろる言った。

「なのは…ママ？」

そう言つて少女がヴィヴィオの後ろを見ると…確かに、大人になった自分のようなのはがいて当然驚いた。

「き、君の名前は？」

「私もなのは、高町なのはだよ！？」

なのはも驚きは隠せない、平行世界に自分がいるのは当然のことだが、ここまで年が離れているのは異例であつた。そして、フェイトに至つては言葉すら出ないほど驚いている。

次元航行部隊の高位執務官である彼女でさえ初めての状況なのだ。何より彼女達は気付くべきだつた。

第97管理外世界は現在2010年以降になつている筈なのに、町の雰囲気なのは達の記憶と何も変わっていない。

町の様子が新居の下調べの時と明らかに違つていたのである。

「いや」まさか引つ越してきたお向かいさんがウチのなのはと同姓同名だつたとは。」

「ええ、私も吃驚してしまいましたよ…。」

その世界の高町なのはの父、高町 志郎の陽気な笑いにははは…と乾いた笑いを浮かべるなのは。

幸い、なのは達が引つ越す予定だつた物件は存在していた。

しかしそこがまさか自分のリリーチャー（平行存在）の住居の向かいだとは

予想だにしていなかった。（接触は予想していたので擬似的な戸籍は用意していた。）

住民の知らぬ間に何かしらの異変を受けていたらしいので予想はできないといつても過言ではないのだが。

「ところで、あの子…ヴィヴィオちゃんでしたっけ？」

学校のほうはどちらに？」

「聖祥小学校にしようと思ってます。

私も、あの学校の出身ですから。」

そう、あの学校の出身だからこそ、もしもの時見方になってくれる子ができるだろうと信じている、だからこそ海鳴市を選んだのだ。

「ねえ、なのは。」

「何？フェイトちゃん？」

その夜、ヴィヴィオが寝た後、ミッドにいるユーノに回線を繋げようととしていたなのはにフェイトが話しかけた。

「一体、何処までが予想外だったの？」

「…！」

フェイトはこういうトラブルに十分すぎるほどの縁がある。

管理局内でも一部の高官から「ハードトラブルスター」と呼ばれる

三人のエースが一人、フェイトはなのはの真意の一端に確実に気付いていた。

「やっぱり、フェイト高位執務官に隠し事はできないね。」

なのはは一旦作業を中断し、先ほどのペーパーモジュールを展開した。

それを見て、フェイトの表情が凍る。

それには…幾体もの怪物と、それらを従えるように佇む一人の魔道士の目撃映像が貼られていた。

長い金髪をツインテールに結び、死神の鎌のようなデバイスを持つ少女。

…その瞳は赤かった…

…次回予告…

ママ達の母校、聖祥小学校に通うことになりました。

お友達もできて、楽しく始まった新しい日常に迫る影
周りの人達の記憶を吸収して成長する怪物。

狙われて、結界に閉じ込められたのは私の友達……！！

次回魔法少女 カイゼル ヴィヴィオ

『イデアゴースト』に、デュアル・ドライブ！！

第三話：イデアゴースト

聖王、それはかつて古代ベルカを治めた王者の称号…

聖王、それは聖王協会にとって信仰の対象であり、最高権力者…

聖王、それは…自らを破壊の道具に変えてしまったかわいそうな人間…

私にはその記憶がない…私は『鍵』として生まれて今は、一人の少女として生きています。

『魔法少女 カイゼル ヴィヴィオ』 始まります。

引越しが済んで数日後、ヴィヴィオの初登校の日がやってきた。

午前7：30、その時間を時計が指したとき、ヴィヴィオの枕元にある髪飾りが宙に浮いた。

『Please wake up were master.』

髪飾りが発する電子的な音声でヴィヴィオは目を覚ました。

「ん、おはよ。」

まだ眠たげに背を伸ばすヴィヴィオ。

『Good morning.』 『Guten Morgen.』

なのはは朝食を作り、フェイト派着替えを用意する。

母親が二人というこの家族構成ならではの奇妙な光景だ。もともと、普段はフェイトの位置にユーノがいるのだが。

「おはよ。」

「おはようヴィヴィオ」

一家を支えるなのはの性格故か、挨拶などの基本的な生活習慣はしっかりしている。

それはヴィヴィオもまた然り、それどころか魔法の無いこの世界での生活にすっかり順応している。

「『『いただきま〜す。』』」

「・・・・・・。」

「ん？どうしたのヴィヴィオ？」

フェイトが言葉をかける、ヴィヴィオはというと、メニューに入っているピーマンを見て硬直している

「苦いの・・・」

「たべなさい。」

ピーマンの味には未だ慣れないようだ。

ヴィヴィオはキャラメルミルクで味を中和しようとする。

この組み合わせもこの家ならではのである。

「ヴィヴィオちゃ〜ん」

「あ、なのはちゃ〜ん。」

この世界のなのは、通称『なのはちゃん』はバス停でヴィヴィオを呼ぶ。

なのはに連れられ、バスの一番後部座席に座る。

隣に座る二人の少女が興味心身にヴィヴィオを見る。

「あ、紹介がまだだったね。」

アリサちゃん、すずかちゃん、この子がこの前言ってたヴィヴィオちゃん。」

なのはの紹介にすずかと呼ばれた少女はああと言い、アリサと呼ばれた少女は

「宜しくヴィヴィオ、それにしてもオッドアイの人なんて初めて見たわね〜。」

といってヴィヴィオに顔を近づける。

「ヴィヴィオちゃん、紹介するね。」

この子達がアリサちゃんにすずかちゃん、私の友達。」

アリサが一回頷いた後、気がついたようにいう

「うん、いつもの事なんだけどさ、同じ年に『この子』はどうなの？」

「あう、それは…にはは」

アリサの突っ込みに困り、笑ってごまかすなのは。

談笑はバスが学校前にたどり着くまで続いた。

「転校生を紹介します。」

朝のホームルーム、先生の言葉を合図にヴィヴィオは皆の前に出るクラスの所々から おー や かわいいー 等の歓声が聞こえる。ヴィヴィオは少し頬を赤らめて自己紹介をする。

「た、高町ヴィヴィオっていいいます。宜しく…。」

当然のようになのはに視線が集まるが、先生が彼女とはただ性が同じだけですと付け加え、

仲良くしてあげてくださいねと閉めて朝のホームルームは終わった。

しかし、大変なのはこれからである。

「ねえねえどこから越してきたの？」

「えと、いたれあから…。」

「そのオッドアイ本物？」

「えと、一応…」

早速質問攻めに会うヴィヴィオ。

フエイトにある程度対処法を教えてもらってはいるが…

「いたれあつて、イタリアだよね、どんな所？」

「身長は？」

「何座？」

「スリーサイズは？」

「高町ヴィヴィオは俺の嫁」

「なんか今問題発言無かった？」

「えと、えと、う…。」

考えが甘かった、ヴィヴィオは質問をさばききれなくなって困り果

ててしまった。

「まったく、見てられないわね。」

見かねたアリサが割って入る。

「しゃくらくっぷ！ヴィヴィオが困っちゃってるじゃない。

私がスポンサーになったげるから私を通して質問しなさい。」

質問攻めの洗礼が終わったあと、学校の授業にもさして支障はなく
昼休みは4人揃って屋上で昼食をとっていた。

「アリサちゃん、今朝はありがとう。」

「どうってことないわよ、アタシが越してきた時も同じ目にあった
もの。」

あのままアナタが流されてるのを見てるほづが逆にキツイわ。」
感謝するヴィヴィオにアリサは当然だとかえす。

加えるようにすずかがいう。

「アリサちゃんときは完全に流されてたものね。」

「バツ…余計な事言わないでよ！」

アリサは照れ隠しにすずかの口を塞いだ。

しかしすずかはその手を押して続ける。

「アリサちゃんは昔から照れ屋さんでね。」

友達になろうって言えなかったからって私にイジワルしてたんだよ。

「

「にやはは、だからこそ私たちはお互いの事を知って友達になった
んだよね。」

なのはも加わって昔のことを語られて、アリサは顔を真っ赤に染め
た。

「あ…あんなたちもあの時からだいぶ言うようになったわねえ…。
うが——！！！」

襲い掛かるアリサ、二人はキャーキャー言って追い掛け回される。

「あ…あの…！」

そんな中、ヴィヴィオは三人を呼び止めた。

「わ…私も、友達に…なってもらえる…？」

…ヴィヴィオは精一杯の勇気を持って言った。

「……ヴィヴィオちゃん。」

なのはが優しくヴィヴィオを呼び…

「何を今更。」

すずかもまた、優しく言いかけた。

そして、アリサはにっこり笑って言った。

「もう、友達でしょ。」

最初は不安げだったヴィヴィオの顔が、段々と明るくなっていき…
ヴィヴィオは元気良く頷いた。

「……うん…！」

そして、なのはが言った。

「じゃあ、ヴィヴィオちゃんも一緒に続きしょ！」

アリサちゃんが鬼…！」

「ちよっと、いつの間にそうなってる訳…！？」

「きゃー。」「きゃー。」

屋上に、少女達の楽しそうな笑い声が響いた。

アリサ「ローウェル

IQ200超えの天才少女という側面を持つ。

偶々父の性がローウェルというだけ。

母の性はバニングスである。

——夢を見た…

なのは達と友達になる少し前に見始めるようになった悪夢だ…

アタシは昼休みに友達と遊び、教室に帰ったところで
疲れて寝てしまったのだろう。

そう自覚できた…

この夢を見るときは、何故か思考だけが覚醒している。
恐らく、アタシ自身を傍観者とする為だろう。

アタシが汚い男共にさらわれて、廃ビルに連れて行かれて…
『

……やれ。』

『嫌…いやあああああああ！……！』

汚しつくされ……殺される夢……

…だからこんな趣味の悪い悪夢…

一刻も早く覚めてほしい…

…あーもう……—

ガタンツ！！！！

「いつまでこんな子供にアダルトな夢見せるつもりよ——！！！！」

アリサは絶叫しながら席を立った。

直後ハツとして、自らの叫びの内容で顔を赤くした。

「……あれ？」

おかしい…静か過ぎる……

皆の声…談笑…何も聞こえない…

……否、この教室にはアリサ以外誰もいなかった。

「……うそ……え？……ええ？」

全校集会か何かで、自分だけ残されたのだろうかと思いを戻す。

…しかし…廊下にも、隣の教室にも、ここから見える体育館にも…

どこにも、誰もいなかった…。

それどころか、アリサには認知できていた…。

それは、空気の違い。

ここは、自分の知っている教室ではなかった。

一方、ヴィヴィオの高町家では、非常事態によって家に設置されていた警報システムが作動した。

「まさか、この世界で!？」

そう言つて料理中、オタマを落とすフェイト。

「聖祥小学校を中心に位相結界…いや、これは認識結界も複合してる。」

なのはは冷静に結界の位置特定と分析結果を確認した。

「こんな高度な結界…一体誰が…？」

なのはが考え込む横でフェイトはヴィヴィオに思念通話をかけた。

「結界・・・？」

談笑に包まれた教室の中…

ヴィヴィオは明らかに異質な魔力の反応に気づいた。

『ヴィヴィオ、ヴィヴィオ! そっち、何か異常はない?』

フェイトの念話が聞こえる。

最悪の場合、聖王を狙う人間の襲撃かもしれない。

だからこそフェイトの声(?)には焦りが感じられた。

『うつん、なにもないよ。』

ここに結界がある…って感覚だけ。』

ヴィヴィオが返すと、なのはが念話に参加する。

『安心して、位相結界と認識結界の複合魔法だ。』

こっちから干渉しなければ…今フェイトママをそっちに送るから。』

『うつん……………』

ヴィヴィオは何か異常はないかと、再度キョロキョロと首を動かす。

『……………!!!!!!』

アリサちゃん、アリサちゃんがない!!!!!!』

『……………!!!!!!』

「イ……け……二……エ……」

「……え？」

背後からの声に、アリサは振り返った。

教室の端に、黒い影が一つたたずんでいた。

まるでその空間を、人の形にくり抜いたような黒い影。
壊れた人形のように頭を斜めに傾けて…

それはあの社長と同じ声で、確かに言ったのだ。

『生贄』と…。

「だ…誰……？」

アリサは震える声で影に話しかけた。

その時……

ギュリツ！……！！

気持ち悪い音を立てて、首をまっすぐにした影が

決まった台詞を言い直すかのように言った。

「悪いなあ、君にはオジサンの会社を復興するための生贄になってもらつよ。」

友達の…アリサの悲鳴が聞こえた気がした。

その瞬間、ヴィヴィオの姿も教室から消えた。

しかし、その事に気がつく者は誰一人としていなかった。
教室には談笑があふれていた…。

ヴィヴィオは誰もいない廊下を駆ける。

『ヴィヴィオ!!』

駄目!!すぐに結界から出て!!』

フェイトがヴィヴィオを止めようと説得するが

「無理だよ、アリサちゃんが…アリサちゃんの悲鳴が聞こえたんだもん。」

友達が怖い目にあうのを、黙って待っていることなんてできない!

「」

『そんな…』

フェイトの念話をなのはが遮った。

『…フェイトちゃん、此处はヴィヴィオに任せよう。』

『なのは!!?』

「……!」

世界の時間軸が乱れている、それはよく聞く現象だった

時空振動、地震と同じように、広大過ぎる次元空間のどこかでは
絶えず新たな世界が生まれ、そして絶えず何処かの世界が滅びてい
る。

そしてその余波として発生するのが時空振動だ。

しかし、最近の異常な頻度の時空振動の発生と

その原因と思しき怪物達

そして、それらを従える親友のかつての姿と瓜二つの少女が

この近くの時空座標に現れたともう一人の親友に言われたときから
だ。

この世界に来るきっかけを考えていたのは。

しかし、予想外の事もあった。

まず、ヴィヴィオがまるで運命に導かれるように

異世界の自分とその親友達と交友を深めていく事。

そして来るべき第一の事件が輝明学園で引き起こされた事。

ヴィヴィオの宿命、これからの彼女が選ぶ道

決断を降す時は音を立てて近付いていた。

なのはは続ける…。

『アリサちゃんが結界に取り込まれたのなら、何時何に襲われるか解らない。』

ヴィヴィオ、一つ約束して…本当に危険な時はフェイトちゃんが来るまで逃げることに。』

「・・・うん。」

ヴィヴィオは髪飾りに手をかける。

目の前にはアリサと、空間を人の形に割り貫いたような影が居る。

ヴィヴィオは勢い良く髪を解き、相棒を覚醒させた。

「グングニル、デバイスモード!!」

「はっ……はっ……」

音もなく影に追われるアリサの根気は

最初の本人の予想より早く尽きかけていた。

自信の消耗も意に介さず無慈悲に一定以下の距離を縮める影の姿は本人がどんなに解っているつもりでも

確実に精神の奥底で絶望を感じさせるのである。

「誰かつ…誰かぁ……!!」

息を切らしながらも必死に助けを求め叫ぶ。

あの時は勇気ある親友が助けを呼んでくれた。

しかし、この結界内には誰も居ない。

助けてくれる親友も、騒がしい学友も

助けを求める声が届くことが無いと、アリサには分かっていた。

ついに、その足が止まる。

壁に寄り掛かり、虚ろな眼で影を見る。

影は速度を変える事なくアリサに近付いていき、そして…

金色の槍が、影とアリサの間に割って入った。

「ヴィヴィオ…？」

割って入った槍の主にアリサは今日出会った新しい親友の姿を見た。

『Gungnill ignition.』

よくよく見ると、槍は双頭。

その二つの穂先にそれぞれあしらわれた宝石から機械的な音声が発せられ

ギャップがこの幻想的な光景を一層不思議に染める。

「しゅばるつえ、ぶいるくんぐ、略式！！」

ヴィヴィオが - 恐らくは - 技の名を叫びながら影に槍の片方を打ち付ける。

すると衝突の直前に槍と影の間に光の線で構成された三角型の魔法陣が発生し

爆発音と共に影が吹き飛んだ。

液体のように粉々に、四散しながら廊下の壁にこびりつく。

「魔力を散らせただけ、再生する前に走って！」

「え、うん！！」

ヴィヴィオがアリサの手を引き、走る。

アリサの足は、先程より軽くなっていた。

適当な教室を見つけ、姿を隠すために入りこみ

二人で身をかがめる。

「ここまで来れば、暫くは見つかからない…多分？」

ヴィヴィオの頼りない予想にアリサはため息を吐く。

そして一息いれて言う。

「あ、あんだねえ…助けに来たっていうならもうちょっと後先考えてよ！」

助けられる側の私が言えた事じゃないけどさ…」

「ふえ…あはは、全然考えてなかった

でも安心して、もうすぐ助けが来るから」

アリサの指摘に一瞬キョトンとしたヴィヴィオだが、すぐ緊張感なく空笑いして頭を下げる。

アリサは頭が痛くなって深い溜息を吐いた後、ヴィヴィオに向き直って聞いた。

「今質問する暇があるなら聞きたいんだけど、ヴィヴィオ…貴女本当は何もの？」

「…っ…！」

ヴィヴィオはその質問に身を強張らせる。

——そう、だよね…。助けに行つて、知られた以上は話さなきゃ私の事、魔法の事…。聖王の事…。——

深く考え込むヴィヴィオの口を突然押さえ、アリサはヴィヴィオと共に頭を下げる。

「ん、んむう！？」

「しっ！後にした方がいいみたい、近くで動いてる…」

ヴィヴィオが目だけを動かすと、廊下の壁の後ろからズリュ、ズリュ…と這うような音がする。

「ん、んん」

ヴィヴィオは驚いた、こんな状況でアリサは既に落ち着きを取り戻していた。

それどころか会話中にまで周囲を認識し、うごめく影の存在にまで気付いている。

ズリュ…ズリュ…ズリュ……ズリュ……ズリュ……

「はあ…」「ぶはっ」

やがて、その這う音が遠くへ行き聞こえなくなったところでアリサはヴィヴィオの口を解放する。

「言いたくないなら良いわよ、どっちにせよアレに対抗できるのはヴィヴィオのその槍だけみたいなんだし」

「あ…うん」

クールにそういつてのけるアリサに、そして詳しくは聞こうとしないアリサの優しさにヴィヴィオはただ感心するのみだった。

「でも、なんであんなのがアリサちゃんを狙ってるんだろう」

「サア？逆恨みが過ぎて化けて出たか、或いは私の悪夢が何でそのまま形になったんじゃない？

あ、でもあの時は廃ビルだったから後者はナシね」

え…と、不思議そうにつぶやいたヴィヴィオに、アリサはバツが悪そうに言った。

「あいつ、私を殺そうとした奴に似てるのよ

正確には私のお父さんに逆恨みして、チンピラに私を汚して殺すよう命令した奴に」

「……………っ！」

アリサのあまりに簡潔な独白に、ヴィヴィオは目に驚愕の色を浮かべた。

「あ…ヴィヴィオには関係ない話だったわね

あの時は、偶然私が拉致される現場を目迎したなのはとすずかがいなかっただけ…」

私は今死んでる筈だったのよ…ひよつとしたら、あいつはその清算に来たのかもね」

少し前、実際にさらわれかけが事はあった。

父の会社のせいで潰れた子会社の社長が、残った財力を使ってけしかけたチンピラに娘であるアリサを殺させようとしたのだ…。

結果は、アリサの言った通り…度重なる偶然によってアリサ・ローウェルという少女はいま現在を生きているのである。

ヴィヴィオは感じた、自分とのつながりを。

「輝く光はこの腕に」

『デュアルドライブシステム更新、出力調整を我が主に委託します』

『対象データ受信完了、ロストログア個体名：イデアゴースト』

「不屈の心は、この胸に！！」

グンクニル！セエエエツト、アープ！！」

ヴィヴィオは双頭の槍を掲げ、虹色の魔力光に包まれた。

『ヴィヴィオ！』

「なのはママ…フェイトママ…？」

魔力光の中でまどろみながらも、ヴィヴィオは両親からかった念話に応える。

『無限書庫のユーノパパから、調べてもらってたアレの正体を送られたから』

今さっき送信しておいた…同時に届いた唯一の封印パッチもヴィヴィオに渡してある

……アリサちゃんを助ける覚悟…戦う覚悟はできた？』

なのはの問いに、ヴィヴィオは力強く頷く。

「私は…ミッドチルダ出身の魔道士…聖王…ううん、そんな事どうだっていい」

虹色の魔力光が殻のように砕け散り、中からバリアジャケットに身を包んだヴィヴィオが姿を露わした。

ザンクトヒルデ魔法学校の、ブレザータイプの制服をドレスのようにしたB」。

「友達を護る為に戦う、魔導騎士！！」

高町ヴィヴィオ、参ります！！」

ヴィヴィオは槍を構えて、影…イデアゴーストに立ち向かった。

……次回予告……

アリサちゃんを助ける為に、魔法の力が遂に解禁！

でも、アリサちゃんになんて言えばいいんだろう…
…ええっ！？封印パツチって、一つだけなの！！？
次回魔法少女 カイゼル ヴィヴィオ
『私の高町家』に、デュアル・ドライブ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0423n/>

魔法少女カイゼルヴィヴィオ

2010年10月10日20時51分発行